

黒白（こくはく）

yuya1318

黒白（こくはく）

月下 美咲 つきした みさき

黒神 聖夜 くろかみ せいや

第一章・・黒と白

黒の誕生・・・黒神聖夜15歳、彼の家は横浜にあり、父（隆39）母（有美45）今年19になる兄（将人）との4人家族だった。母親は幼少のころから体が弱かったが、文章力に長けており何冊もの小説を世に出している人気の小説家だった。父親は、大工の仕事をしていたが、職場でのトラブルを境に5年前から定職にはついていない、全く父親らしくなく子供のことより自分のやりたいことを優先する性格で、酒とギャンブルが大好きだった。若いころは芸能界を目指していたこともあったらしく、40近い年齢だが、かなりの色男だった。近所では評判が悪く、「女房の稼いだ金を他の女に使いこんでるのではないか？金目当てで婚約したのではないか？など噂が絶えることはなかった。

実際に母親の収入は出版本の印税などを含め、毎月かなりの額の収入を得ていた。つまり、家計を支えていたのは母であり、そんな訳もあってか、父は母にはいつも優しく、年の差があるせいか、喧嘩することもなく夫婦間は上手くいっていたようだった。

兄は中学校に進学するころから両親、特に父への反発が強く徐々に非行の道にはいっていった。高校生になったときには地元周辺では有名な不良少年になっていた。自宅で一緒に食事をすることもなくなり、毎日夜遅くまで友人と遊び回っていたが父は叱ろうとすることは一切なく「将人の人生だからほっとけ」と言い。母親も体調不良と丁度連載の仕事が入っていた時期で、忙しかったせいか将人に対し注意することはあまりなかった。

俺は小さいころから動物が大好きで、よくホームセンターのペット販売コーナーなんかでショーケース越しに犬や猫を飽きることなくずっと眺めていた。小学校では飼育係を担当し、兄もそうだったが、運動神経も学年で1・2を争う程良く、社交的で活発な子供だった。

しかしある出来事をきっかけに、聖夜の人生はどん底へと落ちて行ったのだった。

俺が小学6年の春先頃から母親の体調が思わしくなかった、めまい・頭痛が頻繁に起こると話していたが、父は「仕事柄しかたないよ、そのうち良くなるって」と他人事のように言っていた。しかし次第に症状は悪化し、ある日突然、母は夕食の支度をしているときに倒れてしまった。父はあわてる様子もなく、2階の自室にいた俺に「おい救急車呼だー」と大声で叫んだ、急いで降りてきた俺が見たものは、テレビを見て酒を飲んでいる父と、台所にうつ伏せで倒れている母だった。

父はかなり飲んでいたらしく「お母さん死んじゃったかもよー、アハハハ」とへらへらとした口調で俺に言った。

俺も将人と同じくらい父親を嫌っていた。父の顔を睨みつけ急いで119番の電話をした。

救急車には俺だけが付き添った。病院に着く頃には母の意識は戻ったが、「翌日から精密検査を行うので今日はそのまま入院となります」と医師から説明を受け、一人タクシーで帰宅した。

自宅に着くと父親の姿はなく、将人が帰ってきた形跡があった。

兄とは何週間も会話をしてなく、気が進まなかったが将人の部屋に行き母のことを話し、父の行方を聞いた、「あいつならさっきタクシーでどっかいった」とだけ言い母のことについては何も聞いてはこなかった。俺にとって母親以外は家族というより他人に近い存在だった、きっと母さん以外みんなおんなじ風感じていたと思うけど・・・兄貴とはそれなりに仲が良かったけど、それは昔の話でここ何年かまともに口もきいていない、親父は「最悪」の一言に尽きる人間だ、正直もう何年も「お父さん」って呼んだ記憶や、感じたり思えたことはなかった。小さいころから遊んでもらったような記憶も全然ない。覚えているのはたった一度だけ俺が小学1年の頃家族で行った伊豆への旅行くらいだったが、でも内容がほとんど思い出せない。「お父さん」って最後に呼んだのはるか遠くなるような記憶だ、遊んで

もらった記憶も叱ってもらった記憶もない・・・母さんと仲良くしているところを見ると他人に母親をとられているようで、嫉妬することもあった。こんな人いなくなればって何度も思ったことがある。

「母さんどうして・・・」

次の日の朝、玄関には飲んで帰ってきたのか、倒れこむように眠っている父親がいた。俺は学校に休みの連絡をし、病院に行く支度を整えていた。寝ている親父を跨ぎ靴を履こうとした時、電話が鳴った。

看護婦：「もしもし〇〇病院ですが黒神さんのお宅でしょうか」 「・・・あ、はい俺は息子ですけど」

「今お父さんはいらっしゃいますか？」 「・・・今日は仕事休んでいます」

「お母さんの状態が急変したので至急病院まで来てもらえるように伝えてください」

「えっ？わかりました、すぐに行きます」ガチャ

俺はすぐにタクシーを呼び、親父を起こした。

嫌がる親父を無理やりタクシーにのせ病院へと向かった。

父「なんなんだよテメーはよお、朝っぱらからいいかげんにろ」「何処行くんだ」

「母さんの所に決まってるだろ」

父「はあ？だから何処だよ？」 「〇〇病院」

父「病院？？有美になんかあったのかよ？」と平然と喋る父、何度も聞かれたがそれから病院に着くまでの間、俺は何も話さなかった。

病院に着くと父だけが医師に呼ばれ説明を受けた。

脳に腫瘍があり、かなり進行していて脳を圧迫しており緊急オペをするが、手術をしても除ききれず、少しの間寿命を延ばすことしかできないという話だった

医師との話を終えた父が「有美は仕事のストレスで体力が落ちてるからしばらく入院だって、大したことないみたいだからお前はこれから学校行け」と言い俺を無理やり帰らせた。

大したことないはずがない、看護婦の電話の時の言い方・・・嘘だってことは一発で分かった。

俺は学校へはその日行かずに自宅へ帰った。

20時を過ぎたころ親父が帰宅した。「どうなの母さん」

父「点滴して安静にするらしいから、お前が行くと休まらないから1週間は見舞いも禁止だってよ、分かったか？」

「・・・うん」 そしてこの後、結局今日も親父は飲みに出かけていた。

そして一週間が過ぎ俺は学校の帰りに病院に寄った。

病室にはすでに親父が来ていた。母のベットに近づくと、担当の看護婦らしき人が丁度来た「あら息子さん？」

父「ええ、聖夜久しぶりに母さんに会えてうれしいだろ」と笑顔で言った。

看護婦「お父さん毎日、面会時間の初めから終わりまでいるのよー、優しいお父さんでいいわね」

俺は、歯を食いしばり下を向いてすこし頷いた。

母「ごめんね、進学前にお母さんこんなになっちゃって」 「別にいいよ」

母の頭には包帯が巻かれていた、俺の目線に気付いた母「あ、これ？倒れた時に頭を強くぶつけたみたいで」と俺には手術のことは隠すつもりだったらしい。

母さんの様子は明らかにおかしかった、動きたくても動けないような感じだったし、言葉もはっきりしなく聞き取りづらかった。

それから数週間たったが、父は一日も欠かさず決まった時間に見舞いにいっていたようだ。兄はまだ一度も顔を出していなかった。

そして俺の中学校入学式の日、帰り病院に寄ったが、母の様子は以前の面影もなく、ガリガリに痩せてしまい、呂律もはっきりせず喋ることもままならなかった。

さらに4日経ち中学に入ってから最初の休日 came。そう・・・忘れられない日だ・・・

俺が目覚めると、下の部屋からどなり声が聞こえた

「ふざけんじゃねーよ、俺はいかねーって言ってるだろ」・・・将人の声だ

どうやら何か親父ともめているようだった。

将人の胸元を掴み「いいから今日はお前も顔だせ」初めてだったあんな口調で言う父は

将人も始めて見る父の態度に驚いたのか「1回しかいかねーからな」とテーブルを蹴り自分の部屋に戻っていった。

そして10分も経たないうちにタクシーが到着し始めて3人で病院行くこととなった。

兄は病室へは行かず、喫煙所へ真っ直ぐと向かった。

父と病室に向かうと母はゆっくりとした呼吸をし、まだ眠っていた。すると担当の看護婦がきて、「あーどうもおはようございます。黒神さんさっきまで起きえたんですけど、最近は夜間はあまり眠れてないみたいですから

父「大丈夫ですよ、今日も夜までいる予定なので」

看護婦「いつも大変ですね。それじゃあ失礼しますね」

俺は窓際の日の当たる席に座っていた。暖かくっていつの間にか居眠りしてしまったようだ。

ふと目を覚めると、兄と父の声が聞こえた・・・兄「マジでやるのかよ」

父「なんだお前？ママいないとやっぱ寂しいのか？」

将人「関係ねーよ、勝手にしろ」

うっすら目をあけると母の口と鼻を手で押さえている父とそれを見ている兄の姿があった。

(なんであの時俺は止めなかったのだろう・・・俺は母さんを楽しませてあげたかったのかな)

涙がこみ上げてきそうなのを我慢して俺は寝ているふりを続けた、そして突然

「だれかー」「だれかきてください」と父の大きな声・・・急いで看護婦が駆けつける

「有美が、有美が息をしていない」と布団に泣き崩れる父・・・

それを見て無言で部屋を出ていく兄、(はっきりは見えなかったけど、俺には将人は泣いているように見えた)

そして母の葬儀が行われた、父は親戚や、母の親類に挨拶する際「私もアシスタントと、そして夫としてこれまで一緒に生活し、一緒に頑張ってきたのにこんな別れ方になるなんて、、、うううう」涙を流しだす父・・・「すみません、でも今の私にはまだ二人の大切な息子がいます、将人は頑張ってきた部活の大会があり、私の意向で今日はそちらを優先させましたので不在ですが、次男の聖夜もこんなに大きくなり今年からは中学生です。悲しいですがいつもまで悲嘆にふけているわけにはいきません。これからは家族3人で協力し頑張っていきたいと思います。

そして有美へ・・・「「今でも世界で一番愛しているよ、天国で俺3人を見守っててくれ」と声にならないような声で言った。

「最後になりますが、本日は亡き妻、黒神有美のためにこんなに多くのの方に集まっていただき本当に感謝しています。本日は本当にありがとうございました」深々と頭を下げ涙を流す父。

俺も涙が止まらなかった、でも拳は力一杯に握りしめていた。

悲しみの涙か怒りの涙かわからなかった・・・込み上げてくる気持ちは言葉にならないほど矛盾していた。父は

結局・・・いや、やっぱり金目当てで一緒にいたことがこの時はっきりと分かった。

そして母の葬儀は何事もなく無事に終わった。次の日葬儀が終わるのを見計らったかのように将人が5日ぶりに帰宅した。父「テメーはよー葬式くらい出ろ、親戚どもに説明するのがめんどろーが」

俺は何にもする気が起らなかった。けど気分を変えたくて部屋の掃除を始めた、すると昔使ってたおもちゃ箱の中から、伊豆の旅行に行った際にオルゴール美術館で買ってもらった小さなオルゴールを見つけた。

どんなメロディーだったか思い出せなかったけど、まだ動くかと思って試しにゼンマイを回した。

そして小さく音が鳴り始めた・・・とても優しく悲しいメロディーだ・・・

聖夜の目から涙が溢れ出す。拭っても拭っても次から次へと溢れ出す涙。

すごく懐かしい感じがした、あの頃のこと覚えてなかったのに鮮明に記憶がよみがえる、伊豆へ行く道のり、車の中で兄と他愛もないことで喧嘩したこと、ドライブインで急に出てきた車にびっくりして俺が転んだ時「気をつけろバカ、うちの子供が怪我したらどうすんだ」と運転手に父が怒鳴ってくれたこと、一緒に博物館を父と手をつないで歩いた事、旅館の夕食を家族みんな笑顔で食べていたこと。

なんで今まで忘れていたのだろう。でもこれは俺の理想とか妄想かもしれない、現実かどうか分からなかった。

父はその日からほとんど家にはいなくなった、印税の相続権を得ると、毎晩愛人の家に行っていたようだが毎月の生活費だとか光熱費だけはきちんとしてくれた。将人は父がいないのをいい事に自宅を不良グループのたまり場にしていった。

俺は学校へ行くのをやめ自室で籠る生活が続いた。今の唯一の友達、隣の老夫婦が買っている柴犬のトムだ。何年か前からたまに散歩なんかさせてもらったりよく遊んでいた、嫌なことがあったときは、トムの隣で何時間も一緒に過ごしたりしていた。

家にばかりいる聖夜は将人の暇つぶしのターゲットにされ始めた、初めは買い物の使い走りやちょっとした言葉の暴力、だが日がたつにつれエスカレートしき不良グループたちも聖夜を虐めるようになった。だが聖夜はどんなことにも耐え続けた。もし兄弟って関係性がなかったら今頃殺されていたかもしれない、まさに想像を絶する地獄な様な日々が続いた。

そして時が過ぎ2年目の冬のクリスマスの日、自宅でパーティをやると将人たちが盛り上がっていたので、聖夜は嫌な予感がしその日は外出した。けどこの時期の町の賑わいは聖夜には苦痛だった、夜になり、行くところもなくただフラフラとただ歩いていた、ふと気づくと周りには幸せそうな家族、カップル、友人同士で賑わう姿がいたるところで目についた。

聖夜は一瞬はるか頭上空から見下ろした自分の周りの景色が見えた。この華やいだ街中で自分だけが暗く、そして黒く暗く孤独なことに気付いた。その時、頭の中の血管がすべて破けたかのように目の前が一瞬真っ赤に染まりそして暗くなっていった・・・

気がつくと老夫婦の家の犬小屋の前にいた、真っ赤な手には護身用でもっていたナイフが赤く染まっていた。側にはトムが血まみれで倒れていた、しかももう死んでいる。

無意識のうちに殺してしまっていたのである。しかし聖夜の心には罪悪犯はなかった、むしろ晴々とする不思議な気持ちを感じていた。

赤く染まった自分の手を眺め30分程たったろうか、突然土砂降りの雨が降る・・・

雨のせいで自分でも分からないか分からないふりをしていたけど、聖夜はその時、本当は泣いていた。